

まずは、知ろうとする。ことから

太田市立太田中学校 2年 渡辺 響子

私は二歳から五歳までの幼少期をアフリカのケニアで過ごした。現地には日本人医師の公文和子先生が開設した、障がい児のための施設。シロアムの園。があった。私の母もその活動に関心を持ち、ボランテアとして子供たちの世話をするだけでなく、施設へピアノを贈るほど深く関わっていた。そのため、私はよく母に連れられシロアムに足を運んで

いた。たか。当時の私はそこに行くのが嫌で、外見の違う子供たちを不気味に感じては、怖い。近づきたくない。と一方的に避けていた。たからこそ、そんな子ともたに笑顔で優しく接する母の姿さえ偽善のように映り、嫌悪感すら抱いていた。私は彼らとは違う。

それが当時の私の本音だった。

日本に帰国して何年も経ち、当時の記憶も薄れかけていた頃、私はテレビのトキメキタリ一番組「情熱大陸」で公文先生の特集を

拝見した。画面の向こうの先生は眩しく、  
れどどこか張り詰めていて、負担を一人で背  
負い、無理をしているようにも見えた。両親  
は、あの頃贈ったピアノを今でも大切に弾く  
先生の姿を感慨深そうに見つめ、一方私は当  
時の印象と、映し出されている現実とのズレ  
に驚いた。日本に帰国してから様々な経験を  
重ね、多くを学んできたからこそ、幼い頃に  
は気付けなかった先生の凄さから、深く胸に迫  
ってきた。

その番組をきっかけに、私は何年も経て  
ようやく、自分の無知を思い知らされた。シ  
ロアムの活動の本質も、先生や母の原動力も、  
私は何も知らなかった。同時に気がついたの  
は、あの頃の偏見は、相手に障りかあった  
からではないというところ。何も知らないこ  
という無知こそが、勝手な憶測や先入観を生  
み、私の中に恐怖や偏見を作り出していたの  
だ。先生や母が彼らに寄り添い、優しく歩み  
寄れていたのは、相手のありのままを受け入

れ、知ろうとしていたからだ。当時の私から彼らも遠ざけてしまっただのは、自分から何も知らうとしていたからに他ならない。ケニアという地で、偏見と戦いながら、孤立してしまっただけで、その家族の居場所を作れなかった。公文先生と、それを支えた母の行動を、今の私は心から誇りに思っている。

正直、私の日常の中で、障がいを持つ人は常に遠い存在だった。帰国後も特別支援学級の先生として日々奮闘している母の姿を見

ると、時々、自分と母の見ている世界は違っていた。なにか感じる何かがある。母の世界では当たり前前に存在する彼らと、私は関わりがなにか故に、まるで存在しないかのように日々を過ごしている。そのギャップに、私は猛烈な違和感を抱くようになった。彼らは、私から知らないだけで、社会のあらゆる場所で確かに生活している。それなのに、自ら目を向けなければその存在にすら気づけない自分の視野の狭さか、情けなくなっただ。

そうやって改めて社会を見渡してみるとき、障がい者福祉に限らず、私たちの身の回りに多くの生きづらさが溢れていた。誰にも頼れず孤立している人たちのSOSが、多数派の無関心にかき消され、それが時に非行や犯罪への引き金になっていく現実を知った。その理不尽さに気づいた時、自分から見過ごしている無関心な大衆の一員であることに、そして自分自身の無知さと無関心さが、途端に恐ろしくなった。

当時の私は幼かったから、障がいについて知らなくて怖がるのも仕方ない。と片付けてしまふのは簡単だ。にが知ろうとしてもしていないのに知らないことを理由に誰かに勝ちた偏見から無責任な言葉を浴びせ、孤立させて過ちへと追い詰めるのとしたら、これほど恐ろしく、虚しいことはない。

誰もか孤立しない明るい社会を作る第一歩は、まず、知ろうとする。ことではないだろうが、社会の無関心によつて誰かが居場所を

失い孤独を感じてしまう現状は、時に犯罪や  
非行の引き金となり、さらなる生きづらさを  
生み出してしまった。一度つますいてしまっ  
た人や、社会の中で生きづらさを抱える人が再  
び前を向けるかどうかは、私たち一人ひとり  
の意識が生み出す一空氣に大きく左右され  
てしまう。だからこそ、一部の人たちだけに  
負担や責任を押し付けるのではなく、社会全  
体が正しい知識を持ち、不自由や生きづらさ  
を抱えるすべての人に寄り添う必要がある。

その優しさと主体的な歩み寄りの輪を広げて  
いくことこそが、今、私たちが生きるこの社  
会を明るく照らし、いく力になるはずだ。